



キュウカンチョウやインコ、オウムは、どうしてしゃべれるの

鳥は、鳴き方を聞いて覚える

鳥は、たいてい群を作っています。カラスやスズメなどは、群の中で鳴き方を覚え、鳴き方で仲間であることをたしかめあったり、危険を知らせあったりしています。鳥の口や舌、のどの形などは、それぞれ種類によってちがいます。そのため、鳥の種類によって、出しやすい鳴き声が決まってくるので、スズメはチュンチュン、カラスはカアと鳴くのです。

人間に飼われている鳥は、そこで聞こえる声や、音を覚えて、そっくりの鳴き方をしようとします。しかし、たいていの鳥は、舌が短く、人間ののどとはしくみがちがうため、人間のようなことばを、まねすることができません。

物まねじょうずな鳥は、舌が厚くやわらかい

キュウカンチョウやインコ、オウムなど、人のものまねがじょうずな鳥は、舌が厚くてやわらかく、自由に動くため、人のことばのまねができるのです。

セキセイインコは、ふ化後3か月、キュウカンチョウは6か月ごろから、物まねをはじめます。静かな部屋で、とつぜん鳴り出す音などは、よく覚えます。毎日聞こえる「おはよう」などのあいさつの声、イヌの声、げん関のベルの音などをまねします。けれども、人間のことばも音をまねしているだけで、意味はわかっていません。（監修・今泉 忠明）

